
海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

ユートピア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

【Nコード】

N0676Z

【作者名】

ユートピア

【あらすじ】

世界を守った34のスーパー戦隊の受け継ぐ35のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーの力を得た少年は何を求める！！

『派手に行くぜ！！』

第0話 プロローグ（前書き）

新しく始めちゃった・・・

読んでくれたら嬉しいです。

第0話 プロローグ

真っ白な空間に一人の少年が居た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どこだ、ここ?」

漸く絞り出した言葉がそれだった。

「よし、まずはこれまでの事を思い出すか」

少年は自分の行動を思い出していった。一つう！ 朝起き学校へ行く！

二つう！ 学校が終わりバイトへ行く！
三つう！ バイトから帰る途中信号無視のトラックに跳ね飛ばされ
そうな子供を見つけ助けたが自分が跳ねられた！

「・・・・・・・・・・・・・・・・って死んだし俺!?!」

少年は驚きながら自分の体を見た。

「肉片になつてる筈なのに、ちゃんとある」

「それはここが死後の世界だからだ」

少年は声がした方を見ると一人の男性が立っていた。

「何だ、おめえ？」

少年は警戒しながら男性を見た。突然背後に現れたから警戒するのは当たり前だが、

「まあ、それより頼みがある」

「・・・・・・・・・・・・・・・・頼み？」

少年が聞き返すと男性は頷いた。

「実は君にある世界を救って欲しい」
「・・・・・・・・・・はっ？」

少年はいきなりスケールのデカさに戸惑った。それもそうだが、いきなり世界を救えと言われたら誰でも戸惑う。

「待てよ、何でいきなりそんな話に何だよ？ それに唯の人に救えるか？ 世界が」

「だから、その力を与えるから救ってくれ」

そう言って男性が取り出したのは携帯のような物と赤い人形だった。

「何だよそれ」

「携帯のは、“モバイルーツ”この人形のような物は“レンジャーキー”だ」

「その前に俺は救うなんて言ってねえ」

少年はそっぽを向くが男性はモバイルーツとレンジャーキーを少年

に差し出した。

「だったら最初に断る筈だ。なのにお前は力がないと言った」

「だから何だ？」

「救う気にいるんじゃないのか？」

「な訳あるか」

少年は頭をかきながら男性の持っているモバイルーツとレンジャーキーを見た。

「それに俺がそれでその世界を征服するって考えないのか？」

少年の問いに男性は口元に笑みを浮かべて、

「ないな」

それを否定した。

「根拠は？」

「子供を助けた。それだけさ」

「たまたまかも知れないぜ？」

「わざわざ自分が死ぬかも知れないのにたまたまで済ませる奴いるか？」

「たまたま目に映ったからな」

男性は笑みを浮かべたまま少年の肩を叩いた。

「そんな、助けようとする気持ちがあるから君に救って欲しい」

少年は男性とモバイルレーツ、レンジャーキーを交互に見ると鼻で笑った。

「良いぜ。やってやるよ」

「そう来なきゃな」

少年は男性からモバイルレーツとレンジャーキーを受け取った。

「で、どうやっていくんだ？」
「慌てるな」

男性はどこからともなく宝箱を取り出し中身を見せた。

「これは……………」

少年の目に映ったのは数多くのレンジャーキーだった。

「ある世界で地球の平和を守った34の“スーパー戦隊”の力だ」
「スーパー戦隊の、力」
「そうだ。その力と伝説を受け継ぐ35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーだ」
「俺が、受け継ぐのか？」

少年は宝箱を見ながら男性に聞いた。

「ああ、君が守る為に必要な力」

「つまり、持っていてか？」

「ああ、そうだ」

少年は男性から宝箱を受け取り中を見た後宝箱を閉じた。

「さて、次こそ」

「だから慌てるな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まだあんのか？」

男性が手をかざすと赤い光と共に赤い海賊船が出てきた。

「これは・・・・・・・・」

「この船はゴーカイガレオン。君の住む場所も兼ねてる」

「住む場所か、確かに必要だな」

少年はゴーカイガレオンを眺めていると中に入っていた。男性もそれに続き中に入っていく。

「へえ、結構綺麗なんだな」

少年は船内を見ながら真ん中にある椅子に座り隣にあるテーブルに宝箱を置いた。

「これ使って守れてって意味か」

「そう言う事になるな」

少年が隣を見ると男性が柱に寄りかかりながら立っていた。

「後は、仲間を自分の手で探せ」

「当たり前だ。与えられても嬉しくない」

少年は男性の方を見た。

「何だ？」

「聞き忘れたけど、あんたの名前は？」

「人は、私の事を神と呼ぶ」

「神か、取り合えずありがとうな」

少年は礼を言い男性は少年に言った。

「前の名前使えないから、新しいの考えてね」

「いきなりだな」

少年は啞然としながら暫く考え込んだ。

「赤旗・・・・・・・・赤旗海だ」

「赤旗、海？」

少年はゴーカイガレオンと旗を見た。

「ゴーカイガレオンの赤と、旗。そしてゴーカイジャーの海」

「成る程な。それで」

少年、海は神を見ると手を差し出した。

「ん？ 何だ」

「握手、だ」

神は鼻で笑いながら海と握手をした。

「で・・・・・・・・・・・・・・・・どう使うんだ？ これ
等」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そこからか」

海はモバイルーツとレンジャーキー、ゴーカイガレオンを見て言う
と神は溜め息を吐いた。

「頭に直接教えるから、後は自分のやりたいようにやれ」
「ああ、後頼みは聞いというてやるよ」

神が消えると海はモバイレーツを開きレンジャーキーを人形の形から鍵のような形にした。

「行くぜ・・・・・・・・」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ!!」

海はモバイレーツにレンジャーキーを差し込み回すとモバイレーツの上の部分が剣を合わせたような形になり、そして・・・・・・・・

【ゴーカイジャー!!】

その後、海はモバイレーツを前に出し海の体が段々変わっていき赤

い海賊のようなスーツを纏った。

「ゴーカイレッド!!」

海は35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーのゴーカイレッドへ姿を変えた。

「派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッドはゴーカイガレオンに乗り込み舵がある部屋に行く
と舵を握り真ん中部分にゴーカイレッドのレンジャーキーを差し込
むとゴーカイガレオンが動き出しゴーカイガレオンの前に光に向か
うとゴーカイガレオンは白い空間から消えた。

第0話 プロローグ（後書き）

これから、応援お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676z/>

海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

2011年12月2日19時59分発行